

---

## 視愛

反自律(= ` ´ =)

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

視愛

### 【Nコード】

N3215Z

### 【作者名】

反自律（＝、・＝）

### 【あらすじ】

単純で滑稽で醜悪な、出逢いと別れ。  
文字数的には短編だが、あえて連載形式でアップ。  
完結まで毎日正午更新（に、予約しておく）。

## 【なれそめ】

基<sup>もと</sup>が背中に強い視線を感じたのは、今なにも泣き出しそうな天候のある風の強い朝、橋の上でスケッチ・ブックを広げていた時のことだった。紙の上に鉛筆を走らせる作業に没頭しはじめると、基は周囲の状況にわずかな関心さえ抱かなくなる性癖がある。この時も、件の視線の主に、気づかぬ間に背後をとられていた。ひときわ強い風が突発的に吹き、危うく掠われそうになったスケッチ・ブックをとっさに引き戻した時、誰かが背後から自分を覗きこんでいる気配を、はじめて悟ったのだ。

野外でスケッチをしていると、もの珍しいからか、無遠慮に書きかけの絵を覗き込む人物も多い。そのような人種はたいてい、じろじろと「描きかけの絵」そのものを見詰めるのが常なのだが、現在基の背後をとっている人物はなにが目的なのか、スケッチ・ブックではなく、基自身の背中に視線を注いでいる。

まるで、絵そのものよりも、基自身がもの珍しい、とてもいうように。

たしかに、夜明け前後の、普通の人々なら大半が起きてもない時刻に、吹きさらしの橋の上で、しかも、美しい風景などではなく、刻々とうつろう曇天の雲の陰影を必死になって紙上に再現しようとする自分の姿は珍しく、あるいはまた、滑稽でもあるのだろう。

だが、風が強い早朝、それも風を遮るものがない、吹きさらしの橋の上で五分以上もの間、飽きもせず眺め続けるほどには、珍しい行為をしているつもりもない。

基は、見知らぬ人物の不躰な視線を背中に浴びながら、スケッチ・ブックの上に2Bの鉛筆を走らせる。まるで、その視線から、不可解な圧力でも受けているかのように。

必死になって紙の上に鉛筆を滑らせてているうちに、基の意識は、ふう、っと、遠くなる。

【電話】

「はい、もしもし。」

あ。間違いではないから切らないで。

今、この携帯の持ち主が、意識を失ったところだ。たまたま通りかかったおれが、倒れそうになったこの人を支えている。そこに、この携帯が鳴ったんで、取った。

今？　ぐったりとして、体から力が抜けている感じ。

あー。この人のはあれかな。単なる貧血と違っていいのかな？

うん。病弱ではあるが、大きな病気はしていない、ね。うん。もし、かかりつけの医者とかがあるようなら、そちらに連絡したほうがいい。うん。では、病院ではなく、そちらに直接お送りしたほうがいいわけだな。

ああ。そこなら、ここからそんなに遠くはない。あ。いま、ちょっとタクシーがとまった。

住所と詳しい道順を教えてもらえるかな」

## 【その男】

橋の上で倒れそうになった基を介抱したとかいう男を初めてみたとき、<sup>ちんぽ</sup> 円は、その男にに対し、いいよのない不穏さを感じた。

その男は、基の体をタクシーからだし、抱き上げ、円に聞きながら、家の中に、あらかじめ寝具を用意していた客間へと運び入れる。中肉中背でありながらも、人一人を軽々と持ち運ぶその腕は力強く、背中から認める胸板も、意外に厚い。

「ただの貧血ならいいが、念のため、一度医者に詳しく調べてもらったほうがいい」

その男は、まだ中学に上がる前の自分に向ってしごく真面目な口調でそういい、口を軽くへの字型に結ぶ。

短く刈り込んだ髪、太い眉、高い鼻、厚めの口唇、肉の薄い頬、……それなり整ってはいるのかもしれないが、意外に強い眼光が、他からくる印象を打ち消して、威圧感にも似た一種の迫力を放射している。表情自体は、しごく穏やかではあるのだが。

やはり円は、その男から一種の不穏さを嗅ぎとっていた。にもかかわらず、名も告げずにそのまま去ろうとするその男を、円はなぜか呼び止めている。

「あ、あの。朝御飯、よかったら食べていきませんか？

お姉ちゃんの分、余っちゃたから」

なぜこんなことをいいだしたのか、と自分の言動に不審をいだく円を前に、その男はむっとり黙ったまま二秒ほど思案し、「ご馳走になりますか」と、低い声で答えた。

## 【目覚め】

目が覚めて最初に目に入ったのは、見覚えのある天井だった。寝たまま頭を横に向け、あたりの様子をうかがうと、そこはリビンググとして使用している自宅の部屋だとわかった。

「……あれ？」

たしか、橋の上でスケッチをしてて……

「あ。おねえちゃん、起きてた」

障子を開けて妹の円がはいってる。

「朝っぱらから行方不明になって知らない人に送られてくるような真似しないでよね。恥ずかしいから」

「……そうか。気が遠くなってる……」

「そう、たまたま通りかかった男の人が、タクシーを拾って送ってくれた。朝っぱらから橋の上なんかでなにやってたのよ、もう」

「……スケッチ。雲の」

「スケッチ？ 雲の？」

よしてよね、もう。雲なんか家の窓からいくらでも見えるじゃない」

「いや、あのね。朝、四時過ぎかな、ふと目が覚めて、カーテンの隙間からみえた雲の動きがきれいだなー、って思ったら、急に見晴らしのいいところで描きたくなって……」

「で、見知らぬ男の人と朝帰り、ですか。どうでもいいけど、いい大人が小学生の娘に心配かけるようなことしないでよね。」

朝起きて、おねえちゃんがいないのに気づいたとき、ほんと、心配したんだから」

「……ごめん」

「あの男の人にも後でちゃんとお礼するように。わたしも一応お姉ちゃんの分の朝ご飯、ごちそうしたけど」

「ああ、そう。……って、あたしの朝ご飯ないの？ もう？」

「そう、ないの。その彼は、ちょうどさっきお帰りになりました。いやあ、男の人って黙々と多量に食べるもんなんだねえ。お昼の分もあわせて三合炊いてたんだけど、平然と平らげてくれたよ。あまりにも旺盛な食いつぶりに関心して、お代わりをどんどんおしつけちゃったこっちもこっただけどさ」

「うん。あとでお礼するから、その人の連絡先教えてくれる？」

「あ」

「あ、って、まさか」

「そう。連絡先、聞くの忘れた」

## 【待ち伏せ・1】

妹の円は、その男の素性はおるか、名前さえもききそびれた、という。そう聞いたとき、

「一緒に朝食まで摂りながら、なにをやっているのか」

と、基は思っただが、その時分、自分は正体もなく寝ていたわけだから、大きなことはいえなかった。

それで、朝早くから、冷たい風が吹きさらしになった橋の上、あの日、スケッチをしていた場所で待っているのだ。なにせ、その男について、基は、「この時間、この橋を通る（かもしれない）」ということしか、知らない。その風貌に関しても、自分の記憶というのはなく、円から聞いた印象が頼りである。

『ちよつと殺伐とした感じ。あれ、時代劇にでてる、傘張りとかしているおじさんみたいな。』

「寄らばもろとも叩き斬る！」

なんて雰囲気出してた。いや、物腰や言葉は丁寧で穏やかでもの静かなんだけど、なんか、必要以上に迫力があつたな、あれは『だそうだ。』

このような円の言葉は、基自身があのとき背中に感じた視線の印象とも、一致する。顔は知らなくとも、その男を身間違えることはないだろう。

その男は、必要以上にしゃべろうとせず、円ともほとんど会話らしい会話もなかったという。初対面の男を家にあげて朝食をふるまう円も円だが、よばれておきながら、会話らしい会話をしようと試みもせず、三合のご飯を平然と平らげていくその男も、そうとうに変わってはいいる……。

と。

当の、その男らしき人物が、橋の向こうから歩いてきた。ジャケツトのポケットに手をつっこみ、横なぐりの強い風にさらされなが



ら、立ちすくむ基の方に近づいてくる。

男は、基が漠然と想像していたよりも若かった。二十代の半ばくらい、だろうか。背丈は、百七十あるかないか。小柄な基自身よりはだいぶ大きい、昨今の男性としては、さほど長身でもないのだろつ。

ただ、削げたように肉の薄い、骨ばった顔のおかげで、全体に痩せたような印象は受ける。ジャケットを着ているため、実際の体格までははつきりしないが、太っていないことはたしかだ。

太い眉の下のまぶたはとろん、と、半眼に閉じられているのだが、眼光自体は、意外に鋭い。

「あー。もときさん、だったよね。体の方、もういいの?」

その男を観察しているつもりでいたら、目が合い、向こうのほうから声をかけてきた。

## 【朝食】

「遠慮しなくていいよ。前に、君の妹さんにたつぷりとご馳走になったから。まあ、そのお礼」

トーストに小鉢のサラダ、ゆで卵にコーヒーマーという、きわめてオーソドックスな、昔ながらモーニング・セットを前にしながら、基は、「なにをやっているんだ！ あたしは！」と、自分を叱咤していた。

「あ、あの。この前のことで、一言お礼がいたくて……」

「いいから。まずは目の前のものを片付けちゃいけないさい。朝を抜くと、また倒れちゃうよ」

「……はあ」

目の前の男は、基の困惑に感知しようとせず、新聞を読みながら自分の分の朝食を片付けている。

「最近、ファースト・フードに押されて、こういうモーニングだす店も少なくなっただよねえ」

などと、ぼやきながら。

そもそも、普段自宅で朝食を摂る基自身は、「喫茶店のモーニング」というものに接すること自体、初めてなのだが。

「あ、あの日の朝」

「うん？」

あいあい  
相生 えいおう 英央と名乗った男は、基の言葉に答える。

「なんで、あたしの背中を見ていたのですか？ その、書きかけの絵ではなく」

「……うーん、と、ね。」

意外に、人の背中が、雄弁なんだ。あの時の君の背中が、なかなかおもしろかった」

「……背中が、おもしろい……ですか」

「ジャン・リュック・ゴダールというインテリ受けするフランスの

映画監督がいるんだけど、そいつは、『観客は俳優の顔を観るんじゃない。体のシュルエツトを観るんだ』みたいなこといつてるんだ。ウロ覚えだけど」

「……あたし、どんな背中してました？」

「風まかせ。自分の意思を破棄した、我を忘れた背中をしていた。たぶん、君が描いた絵よりも、君自身のほうがおもしろいよ」

それまでの基の生涯で、このような受け答えをするような人間は、周りにいなかった。

基は、何日かに一度、朝、橋の上で、相生英央を待つようになる。

## 【依頼】

何日かに一度、定期的に朝食を取るような仲になっても、基は相生英央が怖かった。

相生英央の物腰や言葉使いは、むしろ丁寧すぎるぐらいだ。自分のような年下の小娘に対しても、おおよそ「馴れ合う」ということがない。「もうすこし、砕けた態度で接してくれてもいいだろうに」と、思うことさえある。

でも、やはり怖い。

なんとなく、「普通の男の人」とは違った、ぴりぴりした雰囲気をもとつていて、近づき難い印象を受けることさえ、ある。

でも同時に、この男のことを知りたい、もっと近づきたい、という想いも、ある。

「アイさんは、……」

このごろでは、基は、あいあい 相生 えいおう 英央のことを「アイさん」と呼ぶようになっていた。

「……あたしといて、楽しい？」

「楽しいよ、もちろん。若い娘さんとの逢瀬を楽しまない男はいない」

口ではしゃあしゃあとそういう癖に、朝の橋の上に会いに行くのは、いつでも基のほうなのだ。

その事実が、基にはもどかしい。

アイさんのほうからアプローチしてきた例は、いまだにない。アイさんは、基の住んでいる家も、携帯の番号も知っているはずなのに。

そうして、会う度に代わり映えのしない、定番の「モーニングサ―ビス」とやらを、奢ってくれる。

芸がないというか、張り合いがないというか。いや別にもっと高価な朝食がほしいというわけではなく、もう少し気を効かせてメニ

ユーに変化をつけるとか、別な場所に誘ってくれるとかしてくれても……。

「いや、今、昼夜逆転生活なんだよね。仕事の関係で」

それとなく水を向けたとき、欠伸まじりにそういう答えが返ってきた。

「だから、今は徹夜明けであつてさ、このモーニングも、おれにとつては晩飯。帰ってから寝るの。これから君と遊ぶような体力なんて残ってないよ。おれには」

はぐらかされているのか、本音なのか……。

いや、たぶん本当のことなんだろうけど、それだけではなく、なんとなく基と深入りすることを避けているような気配も、感じられる。

「じゃあ……」

基がそう切り出したのは、曖昧な関係がはじまってから一月もすぎようかという頃だった。

「わたしの絵の、モデルになってくれませんか？」

## 【交錯する視線】

条件は、「いつでもいいから、相生英央の都合のよい日の朝、小一時間基の家に寄ってモデルとなる。報酬はその日の朝食」ということで無理に飲ませた。

「おれみたいな野郎描いてもおもしろくないだろ」

と、相生英央はごねたが、「本当に描きたいんだ。絵描きとして」と、何度も「お願い」して、結局は承伏させた。

「え。だめなの……」

と、「お願い」した。コツは、上目使いでしばらくまばたきをしないこと。そうすると、目は自然に潤んだようになる。

こういうときだけ「いかにも女の子らしいしぐさ」をする自分にもそれなりに腹がたつが、苦笑いしながら承知する相生英央には、もっと腹がたつ。自分の「お願い」を聞き届けてくれたわけだから、腹をたてるのはお門違いとはわかっていても、やはり、腹がたつ。

その腹がたつ相手は今、基の家のリビングで、基の正面の位置で、椅子に座っている。

報酬、つまり朝食は、さきほど、ちよつと緊張がちな円と三人で摂った。独身だという相生英央を気遣って目玉焼きにサラダと味噌汁という和風のメニューにしたが、相生英央はごはんを三杯もお代わりをしてその気遣いに応え、基は円から聞いていた相生英央の食欲を目の当たりに確認した。

当人いわく、

「食べられるときに食べられるだけ食べる」  
主義だそうだ。

それでよくこの体型を保っているよな、と、基が思っていると、

「脱ぐのか？」

と、相生英央が尋ねてくる。

「脱ぐな」

……真顔でこういうこというからな、この人は。

「自然に。楽な格好でいいから。今日はラフ・スケッチだけだし」

「と、いわれましてもねえ……」

「あ。眼鏡とってみて」

「こうか？」

相生英央は眼鏡を外し、テーブルの上に置いてから、基の顔をまともに見据えた。そのとき、基は、柄にもなく、どきり、とする。

想像していたよりも、「絵になる」顔だった。

日本人にしては、堀が深いほうで、目鼻だちがはっきりしている。顔の輪郭をうつすらというどる不精ひげも含めて、おもいのほか男性的。というか、野趣に富んだ顔だった。「ハンサム」ではないにしろ、「男前」とは、いつていいかも知れない。

「怖いからこつちを睨まないで！」

「……睨んでいるつもりはない」

相生英央は強度の近視である。

「目を細めなければいいんだってば」

「こうか」

相生英央は、黒目がちの目を見開いて、まともに基の目を見据える。

基はその視線の力強さに、ふたたび、どきり、とした。

## 【いつてらしゃい】

『アイさん、眼鏡とるとけっこう渋い顔してんだから、コンタクトにすれば』

『何年か前に試したことあるけど、あれ、ケアが面倒でな』

『モテるよ』

『……女は、なおさらケアが面倒だ』

円は来春、中学生になる。したがって、現在はまだ小学生である。登校拒否もしていない、ごく平均的な児童である円は、したがって本日も登校しなければならない。

せわしく鉛筆を走らせる音を背景に、そんな会話を交わす、よくわからない関係の大人ふたりにことさら元気よく、

「いつてきまーす！」

と、声をかける。

一拍の間をおいて、

「いつてらしゃい」

と、重なった声を背に、円は玄関をとびだす。

……あの二人、自分が学校に行けば二人つきりになることに、ぜんぜん気づいてないな。

と、半ば確信しながら。



## 【寝顔】

円が学校から帰ってくると、驚いたことに、相生英央はリビングのソファを占領して熟睡していた。

「いや、ほら。」

徹夜あけで来てもらってさ、眠そうにしてたから、その、つい、『そのまま寝ちゃっていいよ』っていつちゃった。お布団も勧めたけど、断られちゃった」

代わりに、相生英央の体には毛布がかかっている。

……やはり、このふたりの関係は理解できない……。

と、円は思った。

ただ、無防備な、普段とは違って険のない相生英央の寝顔をみると、基ねえちゃんがモデルにしたくなるのも、なんとなく納得できる。

相生英央の顔は、昨年物故した父に、どことなく似ていたのだ。

「こうやって無防備だとそれなりにかわいいのにねえ……」

「……かわいいか、これが？」

姉妹がなんとも形容しがたい会話をしていると、当の相生英央がいきなり目を開け、がばりとはね起きる。

「いかん。今何時だ。む。まだ間に合う。一度ウチに帰る。おじやました」

早口でまくしたてると、挨拶もそこそこにすたすたと玄関のほうに歩き出した。

「あ。アイさん、明日は来れる？ 朝食を用意する都合があるからさ」

「来てほしいか？」

「……一応」

「では来る。今日はごちそうさま。おじやしました」

一礼して玄関を閉め、早足に去っていく気配がした。

「……やはり、かなり変わった人だね」

「……そうだね」

残された姉妹は、顔を見合わせて、うなずきあった。

## 【相生英央について知っている二、三の事柄】

相生英央という人間は、基と円にとって、初めて接するタイプの人間だ。姉妹が相生英央について知っていることは、かなり限られている。相生英央は、おおよそ、自分のことをしゃべらない。

現在は「夜勤」の仕事をしている。独身である。この近所にアパートを借りている。

それ以上のことは、なにも聞いていない。尋ねれば答えてくれるのかもしれないが、聞くきっかけがない。

それに、他人の事情にも、関心を持たない。

普通の大人だったら、都内の一軒家に十九と十一の姉妹だけが住んでいたら、その背後にある事情を詮索しようとする。すくなくとも、今までの付き合いのあった大人たちはそうだった。

が、相生英央は、ふと目にとまった仏壇を指さして、

「お参りしてもいいか？」

と聞いたただだった。

そして、一度だけお線香をあげて、あとは忘れはてたように、見事になにも聞かない。尋ねない。

そういう意味で、相生英央という人間ほど、彼我の「距離」を測り難い人間もいなかった。相生英央にとって、自分たちの存在はどれほどの意味をもつのか？

あるいは、「基と円にとって」の、相生英央とは……。

## 【待ち伏せ・2】

基と円が相生英央と知り合つて二ヶ月ほど過ぎたある休日の朝、前日の夜半から降り出した大粒の雨はをみて、基は相生英央に雨具を持っていくことを思いついた。相生英央がどこに住んでいるのか、また、どこに仕事場があるのかは知らないが、帰りに、あの橋を通ることは知っている。相生英央は夕方に出勤して朝に帰る生活だし、寒さもいよいよ厳しくなるこの時期に雨に濡れるのは、いかにも健康に悪い。

相生英央と出会つたあの橋にいくと、案の定、すっかり濡れ鼠になつた相生英央が、強い風にあおられながら、飄々と歩いてきた。

「来たんだ」

基の顔をみると、相生英央は、それだけいった。

「来ちゃつた」

基から父の遺物である男物の傘を受けとりながら、相生英央は少し困つた顔をして、いった。

「君のほうもすっかり濡れているじゃないか。しょうがない。ウチに来るかい？ ボロだけど、雨宿りぐらいはできるし、ここからだと、君たちの家より近い」

## 【住处】

初めて訪ねる相生英央のアパートは、私道の奥まったところにある古ぼけた建物で、こわごわと中を覗くと、玄関を開けてすぐのキッチンのところはまだ大きな本棚が居すわり、その中にはぎっしりと本が詰まっている。それでもすべての本は収まりきらないらしく、床に直接いくつかの山も作っている。

基があぜんとして立ちすくんでいると、いったん奥に消えた相生英央が戻ってきて、タオルと若干の衣服を基に手渡す。

「その奥で着がえるといい。いま風呂を沸かす」

相生英央に即されて、曇りガラスの引き戸を通って、キッチンの奥の六畳間に入る。

そこにも同じく中身がぎっしりと詰まった大きな本棚があり、床にも本が山をなして無秩序に散在している。

本棚の反対側の壁には二十五インチくらいのテレビとビデオ。

部屋の真ん中には炬燵が置いてあり、その上には無骨なパソコンのディスプレイが置いてあった。

掃除はあまりマメにはしていないらしく、部屋全体が少しほこりっぽい感じがする。

「ふうええ」

なんだかため息が漏れてしまう。

完全に意表を突かれた感じた。生活感が感じられない、という点からいえば実に基の知る相生英央らしいのだが。しかし、相生英央がここまでの読書家とは予想していなかった。

「着がえたか？」

「あ。ちよつと待って」

キッチンで着がえ終わった相生英央から声をかけられて、慌てて相生英央から与えられたものを改める。バスタオルと、相生英央自身のものらしいＴシャツと、スエットの上下。

急いで濡れた服を脱ぎ、少し考えてやはり濡れた下着も取る。ざっとタオルで体をぬぐうと、Ｔシャツと、スエットを身につける。着がえ終わると、いつの間に電源が入ったのか、コタツの上のパソコンのディスプレイの電源が入っていて、画面一杯に縦書きの文書を表示していた。

「……『群盲』？」

基は、相生英央が書いたらしいディスプレイ上の文章を、目で追いはじめる。

## 【正体】

注ぎ口から湯気を吹き出すヤカンをコン口からおろし、相生英央はやけに静かな六畳間の基に声をかける。

「もういいか？」

返事がない。

ヤカンのお湯をポットに移し、しばらく考えたあと、やはり入ることにした。また貧血でも起こしているのかも知れない。

「入るぞ」

声をかけ、曇りガラスの引き戸を開けたとたん、相生英央は、「しまった！」と思った。

基が、パソコンのディスプレイを熱心に覗き込んでいる。相生英央は、昨日家をでるとき、パソコンの設定を省電力モードでパワーオフにしたままなのを忘れていた。たぶん、なにかの拍子でマウスかなにかが動かかして、勝手に起動したのだろう。たしか、昨日の書きかけの文章といえば……。

「アイさん」

基の背中がいった。

「この『群盲』の主人公って、アイさんでしょ？」

「これは、フィクションだよ」

「うそ。この人、アイさんにそっくりだもん」

「実在の人物、団体、事件などとはいっさい関係がございません」

「……この後に及んでもまだそういうことかな、この人は」

「……それをいうなら、おれがなにを書こうがおれの勝手ではないか」

「あのねえ！」

基は、相生英央が首にかけているタオルを両手で掴み、自分のほうに引き寄せ、まともに目を覗き込む。

「……やめた」

相生英央の目は、笑っていた。

「とりあえず、風呂が沸くまでお茶でも飲もう。いくらかは、体も暖まる」

相生英央は、そういつて手にした保温ポットを基に示した。



【会話・1】

「アイさん、小説書いてたんだ」

「まあね」

「知らなかった」

「そういうこと、宣伝する趣味はなくてな」

「……わたしのことも、いつか書く？」

「書くべき価値を見いだせば、ね」

「アイさんにとって、わたし、価値ない？」

「微妙なとこだね」

「微妙って……もう」

「今後どういう関係を築いていきたいかによる」

「……わたしに聞かないでよ」

「鈍感だね。欲しいものは欲しいとはつきりいつてももらわないと、わからない」

「……底意地の悪い……」

「……風呂、そろそろ沸いたかな……」

「あ、あの！」

「ん」

「い、一緒に」

「入りたいのか？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3215z/>

---

視愛

2011年12月25日12時46分発行